

8月15日に開催された笠松川まつりは天候の影響で花火・万灯流しのみの実施となりました。

この笠松川まつりは明治に始まり、かつては山船・万灯流し・打ち上げ花火が行われていました。笠松川まつりの内容は年を経るにしたがって変わってきましたが、万灯流しと花火は現在まで受け継がれています。

午後7時30分に花火の打ち上げが開始されると、笠松みなと公園を訪れる人がさらに増え、芝生広場や堤防道路は大勢の観客で一杯になりました。さらに、万灯流しが花火打ち上げと同時に始まり、花火が佳境に入るころには数多くの光が川面を漂い、夜空の花火と相まって幻想的な風景となりました。

一夜明けて、8月16日午前6時から、笠松みなと公園の清掃活動が行われました。活動開始30分以上前から活動する人があり、定刻には約100人のボランティアが参加しての活動となりました。参加者はゴミ袋を片手に思い思いの場所に広がり、雨水を含んで重くなったゴミを拾いました。笠松みなと公園や周辺のポイ捨てゴミは意外に多く、中には大きなゴミ袋一杯に拾い集める人もおり、わずか30分程度の時間でしたが、笠松川まつり前のきれいな状態に戻すことができました。

こういったボランティアの心が笠松川まつりとともに後世に伝わっていくことを願っています。



たくさんのボランティアが集まりました

こま化け橋③

かさまつりの民話「昔むかし」

「黒。なんじゃ、これは。」

とたずねたとき黒が一声い
なないた。すると、馬たちが
前足と後足をおつてつくばる
やないか。雄留利がただ目を
ぱちつかせておると、黒が前
足をあげて、馬たちの背中を
渡るまねをしおる。

「おうおう。おまえたちが橋
げたになるちゅうか。」

雄留利は、大声でさけぶと
黒の首にだきついたと。

「畜生のおまえたちまでが、
おれたちを助けてくれるの
か。」

黒は、前足で地面をたたいた。

「なに、いつも餌を作ってく
れるのでおれがしたいと。」

黒はふたたび後足で立つと
大きくいらないた。

「うんうん。及橋は、足近
野の自慢じゃから、なくて

（注）わらなどの植物を編んだむしろの四隅につけた吊り
紐に棒を通し、前後2人で担いで使用する運搬用具

は取じやと。」
雄留利の目からあつても
のが流れた。

「黒のいうように、及のほこ
りは、九間の土橋と栗毛の
馬。これがあつてこそ、大
徳寺さんの領地にわしらも
安心して住める。橋がなく
て領主さまにおとがめがあ
つては。」雄留利は、黒に
はつきり教えられた。黒に頼
ずりすると雄留利は、伊多見
の所へ急いで帰った。

「伊多見をはじめみんなよく
きけ。」

女子は、伊多見に従つて赤
坂より木を引いてこい。男
は、もっこをもつて及橋
に集まれ。」

「はやくいけ。」雄留利は、
おどろくほどの大声で命令し
た。

（つづく）



参考文献「ふるさと輪之内」